

# 平成29年度 学校評価表

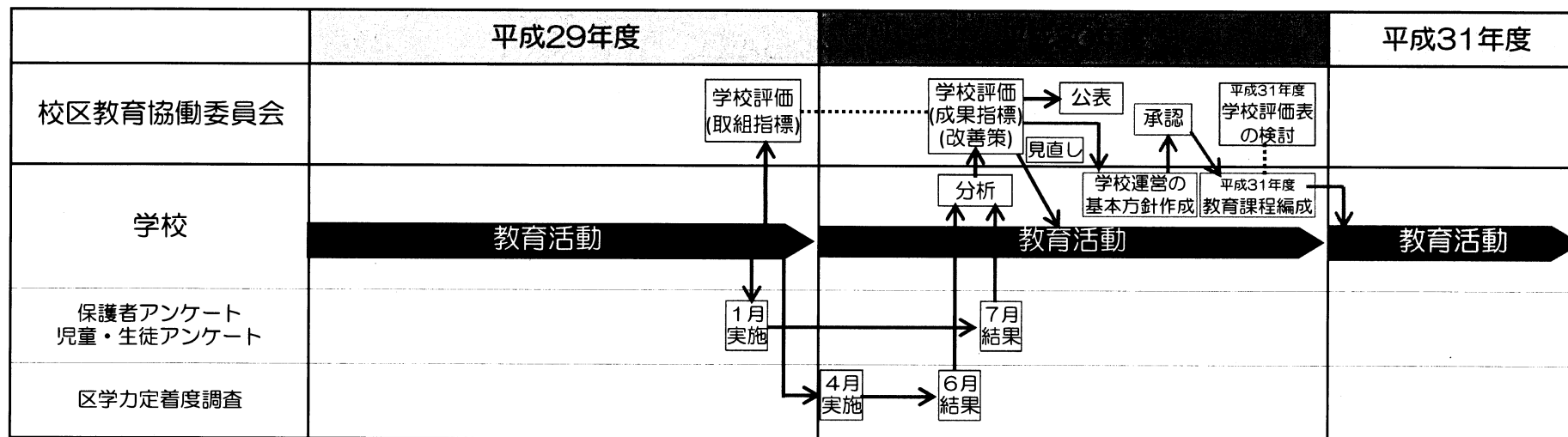
品川区立城南第二小学校 校長 森嶋 尚子  
 城南第二小学校校区教育協働委員会 委員長 今泉 良男

校区教育協働委員会は、品川区校区教育協働委員会設置要綱（改正 平成30年3月30日教育長決定要綱第6号）に基づき、次に掲げる事項について、学校評価を行っています。

- (1) 学力に関すること。
- (2) 人間性や社会性に関すること。
- (3) 体力・健康に関すること。
- (4) いじめ防止の取組に関すること。
- (5) 特色ある教育活動に関すること。

学校評価を行う際、評価項目ごとに「成果指標」と「取組指標」を設定し、取組状況と取組によって表れた成果について把握しています。学校評価により浮き彫りになった学校の課題を委員会で共有し、改善策を考えました。学校評価の結果を公表するとともに、今年度の取組の見直しや来年度の教育課程の編成に生かしていきます。

学校評価の流れ（※平成29年度の学校評価が平成30年度および平成31年度の教育活動につながる部分のみ表記しています。）



平成29年度 学校評価 品川区立城南第二小学校

評価項目1 (学力に関すること)

重点目標		○自ら人や物事に関わる力を学力の土台と捉え、主体的、相互的、継続的に学ぶ力を育成する。 ・興味・関心・意欲を引き出す指導 ・認知に着目した学習者主体の分かる授業の構築		
評価指標	最上段: 成果指標	最上段: 成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降: 取組指標	2段目以降: 取組指標の達成状況の説明		
①	区学力定着度調査では各問の平均正答率を80%とする。	学年によって達成状況に差が見られた。2~4年は全ての教科で70%以上の正答率を得られた。	B	○学年によって習熟度合いに差があることが課題である。教員一人一人の授業力を高める取組を進めていく必要がある。 →校内研究において、「指導者の役割を明確に位置付けた授業の在り方」を研究主題とし、全教員が年間2本(算数と国語の説明文)提案授業を行う。 ○ICTの活用については、その効果を考えながら活用していく必要がある。 →ICTありきの授業にならないように各教員が心がける。常にデジタル教科書等の映像を黒板に映し出すことがよいとは限らない。あくまでその効果や目的を指導者が意識しながら活用するようにする。 ○都のベーシックドリルを活用して、児童一人一人のつまずきを把握するように努める。 →4月に「A問題」に取り組み、新担任が児童一人一人の習熟状況を確認した。11月に「B問題」、2月に「C問題」に取り組み予定である。
	各教科でITCを含め効果的な学習支援。	ICTを活用している教員とそうでない教員とに分かれている。	B	
	学校で共通するノート指導を活用し、統一した学び方で見通しをもって学ぶ。	第3学年以上の算数科において実施。指導者や学年が変わっても、学校で統一したノートの使い方で、1時間の学習の流れを児童が意識できるようにした。	B	
	東京都習熟度別指導ガイドライン「に沿い、東京ベーシックドリルを活用し、基礎基本の定着を図る。	年間を通して計画的に東京ベーシックドリルを活用し基礎基本の定着に向けて取り組むことができた。	A	
	校内研究の算数科において、思考力を高める。	全学級担任は、児童の思考力を高めるために、算数科の研究授業を実施した。	B	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目2 (人間性や社会性に関すること)

重点目標		○自己理解と他者理解のもと、相手意識をもって対話のできる子どもを育てる。 ・社会性の発達に沿ったルールやソーシャルスキルの育成と指導。		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	あいさつについて、 児童アンケート1-①80%以上	児童アンケートの結果、肯定的な自己評価の回答が84%だった。ただし、教員の評価との差が見られる。	B	○朝正門時のあいさつはよくできている、と教員も評価している。ただし、それ以外の校舎内におけるあいさつは自分からできる児童とそうでない児童の差が小さくない。 →日常の校舎内でのあいさつを高められるような具体的方策を生活指導部で立案し、全教職員で行っていく。
	生活指導年間計画の中で重点的に指導する。	年間を通して、全教員であいさつに関わる指導を行ってきた。朝正門時以外のあいさつも少しずつ向上してきている。	B	
	年間を通して、毎朝、看護当番が校門であいさつ指導を行う。	毎日実施できた。	A	
②	言葉づかいについて、 児童アンケート1-③:80%以上	児童アンケートの結果、肯定的な自己評価の回答が76%だった。高学年になるにしたがって自己評価が低くなる傾向がある。	B	○低・中学年の自己評価は、肯定的な回答が80%を超えている。逆に高学年になると、70%前半という結果であった。 →高学年の自己評価を高めることは大切であるが、客観的に自分を見つめられるようになってきた結果とも読み取れる。目先の数値だけに惑わされず、高学年児童の心の成長に配慮した指導を行っていく。
	異学年交流を通して上級生としての責任感や主体性を伸ばす。	ふれあい班交流遊びを計画どおり実施することができた。	A	
③	相手のことを考えている 児童アンケート1-⑤ 2-③80%以上	児童アンケートの結果、肯定的な自己評価の回答が73%だった。高学年になるにしたがって自己評価が低くなる傾向がある。	B	○②同様、低・中学年の自己評価は、肯定的な回答が80%を超えている。逆に高学年になると、70%前半という結果であった。 →②同様、高学年児童の心の成長に配慮した、発達段階に応じた指導を行っていく。 ○学習指導同様、教員の生活指導力も高める取組を研究活動を通じて行っていく。
	「城二小 5つのやくそく」を基準にした指導を行う。	各学級で担任が学級指導を行ってきたが、担任によって指導の温度差があった。	B	

評価項目3 (体力・健康に関すること)

重点目標		○自分の心身の状態について理解し、安定した健康な状態を保てる力を育てる。 ・心身についての知識 ・健康な状態の理解		
評価指標	最上段: 成果指標	最上段: 成果指標の達成状況の説明		
	2段目以降: 取組指標	2段目以降: 取組指標の達成状況の説明		
①	進んで運動する児童80% 児童アンケート 1-④	児童アンケートの結果、肯定的な自己評価の回答が77%だった。高学年になるにしたがって自己評価が低くなる傾向がある。	B	○低・中学年の自己評価は、肯定的な回答が80%を超えている。逆に高学年になると、70%前半という結果であった。 →高学年は休み時間に委員会活動等の仕事が入ることがあり難しい面もあるが、体を動かすこと自体億劫がる傾向も見られ出すので、教員と一緒に遊んだりクラス遊びの時間を設定したりして、児童が体を動かす時間を意図的につくるようにする。
	品川スポーツライアルの取組を6～7月、11月～1月の期間に分けて学校全体で取り組んでいく。	6～7月の結果は、4年生が6種目において、区内で10位以内に入る成績を上げている。担任による取り組みの差が大きい。	B	
	ワミニッツエクササイズを、家庭に協力をお願いしながら、年間を通して進めていく。	クラスの1/3～半数程度の児童が、ほぼ毎日実施している。	B	
②	早ね早起きする児童80%	この項目は、アンケートを実施することができなかつたため、実態が把握できていない。	C	○「早寝・早起き」の啓発を進める。 →保健だより等で早寝・早起きの必要性を各家庭へ知らせるとともに、強化ウィーク等を設定し、各家庭に協力・実践していただく場と時間を設ける。そのうえで、実態を把握する。 ○歯みがきについては、給食時間終わり際の5分間、全校で「歯みがきタイム」に取り組んできた。 →学校ではこの取組を継続する。さらに、家庭での起床後・就寝前の歯みがきへの協力を依頼する。
	朝の歯みがきを、家庭に協力をお願いしながら、年間を通して進めていく。	休日の調査であるが、45%の児童が必ず磨くようになったと答えている。	B	
	市民科の自己管理領域の学習を通して取り組む。	予定どおり学習に取り組んでいる。	B	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目4 (いじめ防止の取組に関すること)

重点目標		○一人一人の児童を多面的な視点でとらえ、学級内の人間関係にも着目した総合的な理解の上、予防的な教育、指導を実施する。 ・児童状況把握表の作成と活用 ・生活アンケートの活用 ・SST(ソーシャルスキルトレーニング)の考え方を取り入れた指導。		
評価指標	最上段: 成果指標	最上段: 成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降: 取組指標	2段目以降: 取組指標の達成状況の説明		
①	トラブルの認知件数を前年度100として80%に減らす。	トラブルの認知件数は前年度とあまり変わっていない。	B	○トラブルの認知件数はあまり変化がなかったが、これは各教員が児童一人一人・各クラスの状況にきちんと目と意識を向けられているから、とも捉えられる。ただ件数を減らすことだけを目指ると報告しにくい職場の雰囲気になってしまうことが考えられる。 →2学期後半から導入している「連絡票」の活用を今後も続け、まずは職員室全体で各クラス・各学年の様子を共有する取組を続ける。「してはいけない5つのきまり」についても形骸化を防ぐためにより実態に即した形に実施方法を変える。
	連絡票を使った現状理解をしっかりと行うことで減らしていく。	2学期後半より導入し、事件、事故に分けて、事例を職員室内に掲示して情報の共有を図っている。	A	
②	してはいけない5つのきまりを守っていると回答する児童80%	児童アンケートの結果、肯定的な自己評価の回答が全校で84%だった。	B	
	毎週木曜日、学級指導で、挙手による調査を実施し、いじめの早期発見に努める。	毎週児童から情報が入ってくるので、いじめの予防になっているが、やや形骸化している一面もある。	B	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成